

日常生活と習慣 - 3

私は小樽ジャーナルへの数回の寄稿の中でアメリカ人は合理主義者であり、且つ契約主義者であると述べて来た。しかしそれでは『義理人情』とか『人情のしがらみ』などが本当にアメリカ人に欠けているのであろうかと疑惑の念を抱くのは必至である。勿論それは個人差にもよるが、一般にアメリカには少なくとも『義理』を重んじるような社会構成はない。『人情のしがらみ』も薄く、義理的な感覚は一時的に存在したとしても短期間に消え薄れるものである。

しかしアメリカ人には真心と友情が存在する。ちなみに私はニュージャージー州在住23年で一人のかけがえない友人、アメリカ人を得た。長年に渡る会社の部下ではあったが、私の配下を離れて初めて彼の持つ『真心』に触れる事が出来た。2008年、私は10月末にアメリカを発った。計画としては2009年1月に再び帰米し、引越し、定年手続きを終わらせ、2月上旬に小樽に定年帰国となるはずであった。しかし日本滞在中、公私共に不都合が生じ、前述の目的で帰米する事が出来なくなった。私の会社の部屋、アパートはそのままにして来た。私のその友人は会社の私の部屋の中を全て吟味、整理をし、且つ私のアパートに残して来たものの全てを整理、処分し、家主に引継ぎをやってくれたのであった。勿論無料であった。『Give and Take』の合理主義者のアメリカ人、しかし彼と私との関係は23年間かかって築き上げた『真心』なる友情の何ものでもなかったと信じている。私は私宛の全ての郵便物を彼の住所に転送手続きを取った。郵便物の海外転送は出来ないからだ。今日現在、彼は私の郵便物、銀行書類、年金書類などを開封吟味し、重要書類は全てスキャンしてe-mailしてくれる。必要なものは郵送もしてくれている。これがお互いの信頼関係の上に成り立つ真心と友情でなければなんだろうか？

私の現在のジレンマは日本人の示す親切さが何処まで『義理』で『真心』なのかが判断出来ない事だ。一般にアメリカには『お礼返し』がない。クリスマスのギフト交換大々的に行なうがこれは歴史的慣例である。日本の年末年始の歳暮的なものではあるが、普通は個人から個人への贈り物であるから、日本のお年玉の様なものである。ちなみにアメリカにはお年玉はない。日本では20年前の香典返しですらすらするのだ。日本の習慣として挨拶的に『おかげ様で.....』と言う事はしばしば聞く。又日本はお世辞大国で耳にする言葉が何処までお世辞なのか、皮肉なのか、真心で言っているのかが分かりづらいのである。犬が大嫌いな人でも、知人の犬を見て、『まあ、可愛い犬ですこと！』などと心にもないお世辞を平然と言うが、アメリカ人女性は『私は犬が大嫌い！近寄らせないで！』とはっきり言うのである。申し訳なく思うのは犬の持ち主で、文句を言う人ではない。日本では『私の犬にケチをつけないでよ！』と開き直る事であろう。

アメリカには終身雇用制度がないから生涯一つの会社、あるいは公務員としてでも一つの職業又は職場に留まる事は教職を除いてその数は少数である。日本の企業、公務員のような退職金制度が無いし、職場を点々としても社会保障金（年金）の恩典は増大する事はあっても減少する事はないから、機会があればアメリカ人はより高い給与、良い恩

典を求めて職場を点々とするのである。その中であって、職場内で同僚と深い信頼関係を結ぶ事は稀であると言っても過言ではない。その点私は幸運であったと思っている。

日本へ帰国して私の観察を通して感じる一つの事は、日本の男尊女卑生態である。特に家庭においては夫の多くは掃除、料理、晩酌の準備などの諸々の家事は妻任せの様である。しかし私が改めて気付いた事は夫の還暦が過ぎて定年退職すると、逆に女尊男卑生態に代わって行く様子が目に付くようで残念に思う。日本男子は定年退職すると、使い古した雑巾の様な存在になり、長年寄り添って来た妻からはじき出されてるみたいだ。アメリカでは子供が18才になるのを親は待てない、と私は書いた。『子離れ』、『親離れ』の時である。それが成し遂げられる段階では、待ちに待った『夫婦』だけの安らぎの生活が待っているのだが、日本では『夫育て』到来の故に『夫離れ』が待っているのであろうか。『子育て』とか『家事』は妻に任せ、仕事、仕事でヨボヨボ寸前で定年を迎えた夫、その間に夫婦愛は消え失せ、残ったものは単なる義理的な相棒となってしまうのであろうか？

日本では夫の単身赴任は人生の一環であるが、アメリカでは皆無に近いのである。それだけに男女の関係は一生を通して密接なものであるし、そうでなければならない。単身赴任の夫を持つ妻、あるいは夫自身、どの様にして夫婦の愛情を保持していくのであろうか私は不思議に思う。しかし、現実として単身赴任の任務を解かれて再び問題なく共に家庭生活を営む事が出来る日本の夫婦、それが深い愛の絆とすれば、私は最高の敬意を表したい。しかしながら、聞くところによると、これは私の驚く事の一つではあるが、日本の夫婦は早くから、床(Bed)を共にせず、それどころか、寝室ですら独立していると言う。単身赴任が要因をなす一人暮らしの為、あるいは老いが予想より早く来た夫に煩わしさを感じるののであろうか？まさか、その妻たちが『生命保険をたんまり残して、一日も早くあの世へ。。。』なんて思っているのではないだろうか。私の勘違いであれば良いのだが。

私のアメリカ在住中、周囲には還暦を過ぎた夫婦が沢山いた。どちらかが病で療養中の場合を除き、Bedが別とか、寝室が別など聞いた事がなかった。私の家主夫人は彼女が72才の時、夫に先立たれたが、一年後には再婚した。それから10年後の2009年、その二度目の夫が他界したが、私の知っている限り、二人はBedは常に一つであった。この間の10年、二人はアラスカ・クルーズを始めとする諸々のクルーズ、ヨーロッパ旅行、数限りない国内旅行、ダンス、そして数々のパーティを楽しんでいた。

私はアメリカに住む以上、女性を崇拜する限り、平穩無事に女性軍と共存出来ると信じていたので、会社、学校、教会などの色々な集まりであたかも冗談の様に良く言っていた事がある。それは『我々野郎共はなんだかんだ言っても、結局のところ、女の為に生涯をかけて働いているんですよ！—After all, no matter what, we all men are working hard for women throughout our life!』と言うと、女性たちはきまって『うそばかり！— Oh, what a lie!』と私は良く怒鳴られたものだ。しかしこれは日本とて真実ではないだろうか。しかし、どう見てもアメリカは女性優位である。少数ではあるが次がその例である。

『Ladies First - ご婦人方、お先に』と言うが『Gentlemen First』とは言わない。
『Mother and Father - 父母』と言うが『Father and Mother』とは言わない。
『Ladies and Gentlemen - 皆さん!』と言うが『Gentlemen and Ladies』とは言わない。

しかし日本の女性達も負けずにと1月31日を『愛妻の日』と企業から勝ち取った。日本男子は力なく『愛夫の日』を勝ち得ないのだから地に落ちたと言っても仕方ない。まだある。軍艦の代名詞は『She....』で始まるのである。そればかりではない。最近は変わって来ているが、アメリカの大学の女子寮と男子寮では雲泥の差があるのだ。女子寮はまず Main Door から入るとそこには立派な応接間があり、大きなテレビがある。且つ小さな接待用の部屋が何室もある。勿論お化粧室も付いている。丁度高級ホテルのロビーみたいだ。しかし男子寮となると、何も無い。小さな汚い簡単な待合室みたいなところに長いすが一個か二個ぐらい置いてあるだけだ。その昔アメリカの大学で始めて女子寮を訪問した時その不公平さに私はビックリした。しかし、女性には弱いところがある。大学時代の事であるが、女子学生から男子学生にデートは申し込まない習慣があった。卒業舞踏会も同じである。金曜日の夕方はモテナイ女子学生にとっては寂しい夜となるのだ。その様な夜は女子寮の窓から狼の遠吠えの様なうめき声さえ聞こえてくるのだ。デートの約束が成立している女子学生はおしゃれをして悠然とあの女子寮の応接間で男子学生が迎えに来るのを待つのである。私もアメリカ大学生生活最後の年にかろうじてこの気分を味わった。

これだけアメリカの社会を君臨する女性ではあるが、Women's Liberation (女性解放運動) Organization と云う組織が存在する。これは男尊女卑を非難し、男女平等の権利をありとあらゆる分野に要求するグループである。特に給与、昇格に多大なる発言力を持っており、彼女達の要求には私は全く同感であった。私は自分自身、女性崇拜派(残念な事に今もってこの癖は治らない)であったから昇給、昇格に関しては女性スタッフに対しては優遇政策を取って来たのである。私の世俗倫理は『女あつての男』であり、その逆ではない。したがって、私にとっては Women's Liberation の倫理には距離を置いているのだ。

しかしこの女性解放運動が言語に及ぼした影響は無視出来ない。例を挙げてみると、

Chairman (議長) 男ばかりが議長とは限らない。故に Chair Person に代わった。
Mailman (郵便配達屋) 男ばかりが郵便配達屋とは限らない、故に Mail Person と云う。
Congressman (議員) 男ばかりが議員とは限らない、故に Congresswoman と云う。

いつぞや私はこの事に関して Business English の講習会の席上質問した事があった。ではマンホール(道路横の下水管アクセスの入り口)は英語で manhole (『男の穴』が直訳であるが、マンホールに出入りするの男労働者であったのが語源。hole は『穴』の意味)と書くが今では女性もその職業についているので、では womanhole と呼ぶべきか、と聞いたら、同席していた女性数人に睨まれた。後日判明した事であるが彼女達は偶然にも Women's Liberation (女性解放運動) Organization に所属していたと言うのだ。

さて私の小樽繁華街の散歩は続く。日本の一般女性に当てはまると言っても過言ではないと思うが、日本の女性は公共の場で男性からの親切を受ける事を知らない。私は長年の自然に身についた癖で、例えば私の住むマンションや長崎屋への入り口で、女性が背後にいれば、ドアを開けて彼女達を先に入るよう促し、ドアを開けたままで待っているのである。その女性たちの顔は混乱そのもの、そこに突っ立ったまま動かないのである。私の顔の色を伺い、多分『変な男』と思っているらしい。『どうぞお先に』と言うと、やっと自分の為にドアを開けて待っていてくれたと思うのであろうか、お辞儀をしてから入る。なぜ、簡単に『どうも』と言いながら、あるいは軽い会釈で中に入らないのであろうか、と不思議に思った。私としては当然な事をしているのに過ぎない。なのに何故躊躇するのであろうか？不思議に思っている日、ドアの内側でしばらくの間観察してみた。驚いた事には、ここで『男尊女卑』なる自然な光景を見たからである。女性に、たとえその女性がベビーカーを押していたとしても、ドアを開けて女性を入れてあげる男は皆無であった。男も女もそうであるが、ドアを開けるや否や、背後に誰がいようと無頓着、自分だけスイスイと入って来るし、出て行く。